

# 音とのかかわりを求めて

—プレ楽器とその可能性—

野波 健彦・柳屋 昭\*

In Search of How to Let People Discover Their Own Sounds:  
Pre-instruments and Their Possibilities

by

Takehiko NONAMI, Akira YANAGIYA\*

(Received November 30, 1992)

## [Abstract]

In the previous paper, we studied how to teach children to express themselves in the music education and concluded that it is necessary to make much of “being actively involved in making sounds.” Specifically, we proposed the three stages of Play, Search, and Create; which we have come to think are to be carried out in a music education environment we call the “Forest of Sounds.”<sup>1)</sup> After the paper, therefore, we experimentally produced “pre-instruments” for the implementation of the “Forest.”

The present paper shows the pre-instruments we have made, discusses the reactions to them of junior high school students and adults, and explores the possibilities of the pre-instruments in terms of their relevance to <creative music making>, <relaxation>, and <enlightenment of people for sounds>, thereby providing prospects about our future research.

Key words: music education, making sounds, three stages of play, search, and create, forest of sounds, pre-instruments, possibilities of the pre-instruments, creative music making, relaxation, enlightenment of people for sounds

## I はじめに

前回、音楽教育における表現のあり方について考察し、創造的音楽学習においては「音とのかかわり」を大切にすることの必要性を述べてきた。また、その具体的な手順として「あそぶ」、「さがす」、「つくる」の3段階を提示し、そのための環境として「音の森」を構想し、プレ楽器やサウンドオブジェなどを考案・試作した。<sup>1)</sup>そして引き続きこの構想のための楽器として、素材を生かした・音の響きがよりよい・操作が簡単な・作りやすい楽器をめざして製作してきた。

本稿はこれらのプレ楽器とその製作方法を紹介するとともに、このプレ楽器に対する生徒などの反応や音に対する受けとめ方を述べながら、プレ楽器のもつ可能性について考えてみたい。

---

\*山口市立白石中学校

## II プレ楽器とその製作過程

郡司によると、古来中国では楽器を木、金、土、石、竹、糸、革、匏の8種類の材料に基づいて分類してきた、<sup>2)</sup>と述べている。我々の試作しているプレ楽器も「素材の音」をめざしたものである。前回の試作では音として引き出すことに難点もあったが、今回はある程度響く音として取り出せたように思う。ここでは素材別にプレ楽器とその製作過程を述べてみたい。



(1) セラミックベル

### ①土の響き

信楽テラコッタ粘土を使って、鐘、ワインカップ、板状のサウンドピースを成形し、1200度で焼き締めた。高温で焼成したことで比較的澄んだ音色を取り出すことができた。

#### 《土の鐘（セラミックベル）》

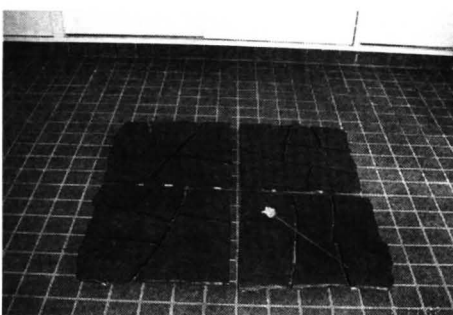
ろくろでさまざまな大きさの釣り鐘を作った。鐘の厚さについては10mm～15mmとし、強度が保てるようにした。上向きに据えてもよいが、ロープで吊るした場合の方が響きが良い。この型のものは音の響きもよく、また音の減衰時間も長いことがわかった。



(2) セラミックカップ

#### 《セラミックカップ》

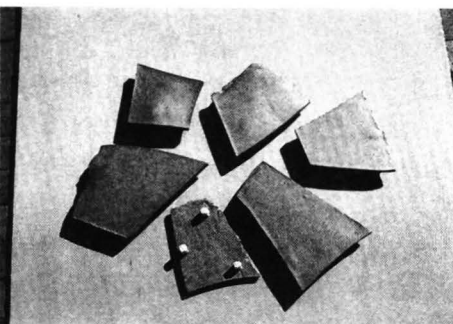
いろいろな大きさのワインカップを作って音を出してみた。音叉などでトレモロ奏をすると面白いように思う。



(3) 陶板のサウンドオブジェA

#### 《陶板のサウンドオブジェ》

約40kgの粘土を1200mm×1200mmの平面に厚さ20mm～30mmに広げ、モザイク状にカットしたものである。裏面に発泡スチロールのスペーサーが取り付けられている。モザイク状の形態と煉瓦の色合いがマッチして造形的な面白さがある。形状や焼成の仕方によって音に微妙な違いができる。鉄板と比較すると音の減衰時間は短い、澄んだ音色である。また、さまざまな形状に加工できるので、幼児が興味をもつような動物などの形に作ることもできる。



(4) 陶板のサウンドオブジェB

## ②鉄の響き

鉄から音を取り出すためには焼き入れが必要であると考えていたが、普通の構造材でもスペーサーを取り付けることで、音として取り出すことができた。また、丸パイプ、角パイプなども鉄の音として活用できるように思う。

### 《鉄のサウンドオブジェ》

9mmの鉄板（900mm×1800mm）2枚をモザイク状に切断してもらって、鉄のサウンドオブジェを製作した。これは、鉄の構造彫刻作品を製作している作家<sup>3)</sup>を訪れ、許可を得て同作家の作品「音のかげら」の形態を模して試作したものである。鉄片の面積が広いほど音高が低い。音の減衰が緩やかであることから、このオブジェは音遊びにも適しているように思う。

### 《パイプの音》

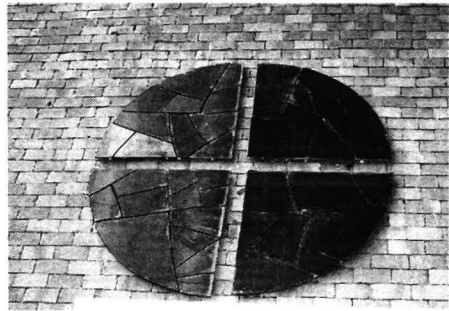
これは角パイプや丸パイプをランダムに切断したものである。材料が手に入りやすく、音としてもかなり響くので活用できると思う。

## ③木の音

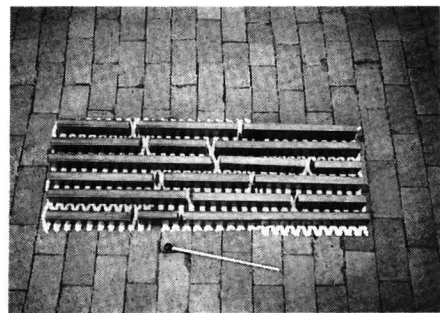
例えばログドラムのように、人は古くから丸太を叩いて音を楽しんできた。多くの楽器に木材が使われている。しかし、木材を直接叩いて音を出す楽器としては、木琴やいわゆるウッドブロックの類しかない。木は種類も豊富で、入手が容易であり、加工がしやすい特性がある。

### 《ウッドブロック》<sup>4)</sup>

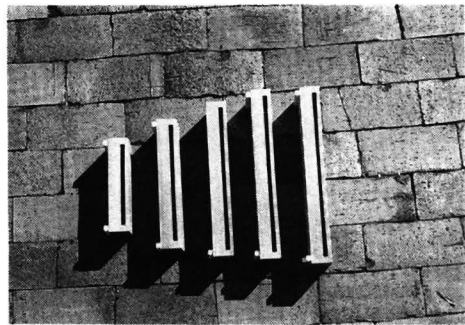
断面が35mm×70mmの木材（アピトン・ベイマツ）を用意し、長さを100mmから600mmまでの間でさまざまに切断し木片を作る。35mm幅の上面から7mm～8mm残し、左右10mm～15mmの間隔を取って幅9mm深さ65mmの穴をあけていく。角のみ盤を使うと能率的に作業ができる。長さが短すぎると音は響かない。また、長すぎると音の響きが悪くなる。響きをよりよくするために裏面にスペーサーを取り付けた。ケヤキやサクラを使うと響きのよい音が得られる。材質によってもかなり音高が異なる。



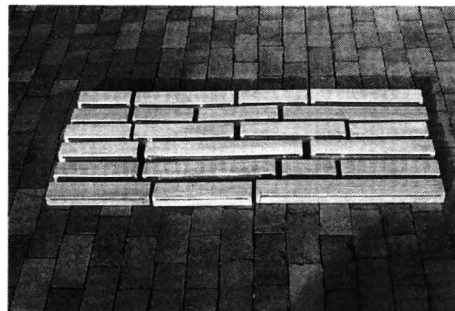
(5) 鉄のサウンドオブジェ



(6) パイプの音



(7) ウッドブロック A



(8) ウッドブロック B

#### ④竹の音

竹は笛の材料として使われることが多い。前は横笛や、パンパイプを試作した。竹を叩いて音を出すものとしては富山県の「こきりこ」やインドネシア・バリ島の「ジェゴグ」が知られているが、この身近な素材は、叩く音具の材としてはあまり利用されていないように思う。

##### 《スリットドラム》<sup>5)</sup>

前は竹の筒に左右から鋸溝を入れてみたが、響きは不満であった。今回は南太平洋の島々を中心に広まったと言われるスリットドラムにヒントを得て両端の節を残し筒に9mm幅の帯状の穴をあけてみたところ、意外によい響きが得られた。また、両端の節を切り落としても同様によい響きが得られた。竹の質が新しくて柔らかいものは響きがよくない。年数が経って表面の皮が黄色くなった肉質の硬い竹が材料としてはよい。また、胴の細かいものや、節と節との間隔が短いものは響きがよくない。

##### 《バンブーシロフォン（割竹）》

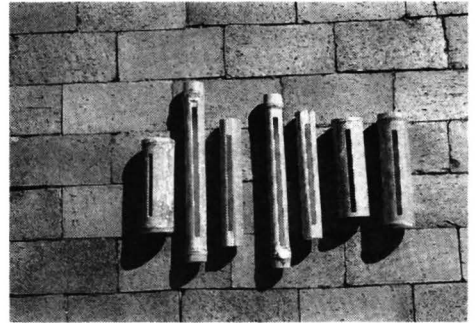
竹を半分に割り、クッションなどの上に並べたものである。簡単に作れて意外によい響きが得られる。材質についてはスリットドラムと同様である。

### Ⅲ プレ楽器に対する反応

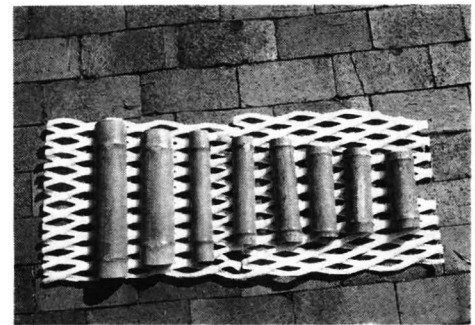
試作したプレ楽器がどのように受けとめられるか、それらの展示やデモンストレーションなどでの筆者らの観察や調査の結果に基づいて述べてみたい。

#### 1) 音楽教育セミナーでのデモンストレーション (山口大学大学会館, 1992年8月26日)

大学会館ホールにこれらのプレ楽器を展示した。これを使っての打楽器専攻学生<sup>6)</sup>の20分間の即興演奏を、約60名の受講者に聞いてもらった。セラミックベルの音に対して「澄んだいい音」という評価がなされたが、これは見た目の面白さも加



(9) スリットドラム



(10) バンブーシロフォン



(11) 音楽教育セミナー



(12) 中学校文化祭でのサウンドコーナー

わっての反応であったように思う。受講者は大半が音楽の先生であり、セラミックベルに対していわゆる「いい音」という感覚で判断されたように思う。また、ウッドブロックにも比較的関心が寄せられたが、楽器としてのウッドブロックの音色を思い起こされていたのではないだろうか。しかし、鉄板など他のプレ楽器の「聞き慣れない音」に対してはあまり関心が示されなかった。これらの反応の中に音楽の先生であるが故の「音へのこだわり方・選択の仕方」が窺えた。このことは偶然にできている音列に対しても無関心であったことから言えるのではないだろうか。

## 2) 中学校文化祭での展示 (山口市立S中学校, 1992年11月8日)

S中学校の文化祭でプレ楽器を展示し、生徒、保護者に自由に使ってもらった。

「わー！これ何ー！」、「音が出るー！」、「面白い！」。午前のステージが終わって昼食時間に入ったところで、サウンドコーナーにどっと生徒が集まった。マレットで叩いて歓声を挙げている者、音を聞いている者、自分の番を待っている者など一時サウンドコーナーは混雑するほどの賑わいをみせた。生徒の中にはマレットを放り上げて音の出方を楽しんでいる者や、2人で移動しながら叩き合い音の響きを確認している者たちがいた。このように音の出し方についていろいろ工夫する場面が見られた。保護者の中にも面白がって叩いてみる人や、自分のこども時代の経験を話す人もいた。また、作り方や製作意図について質問する人、セラピーのための用具として使ってみたいと話す人など、大人にも大きな関心をもってもらえたように思う。

このサウンドコーナーの印象について49名の生徒たちに尋ねたところ、次のような意見や感想が聞かれた。

### 質問1. 「印象に残った楽器順に番号を記入して下さい。」に対する集計結果

印象に残った楽器の順番	1位	2位	3位	4位	5位
木 (ウッドブロック)	5(1)	14	8	6	2
鉄 (鉄のサウンドオブジェ)	28(6)	1	2	3	1
土 (陶板のサウンドオブジェ)	0(1)	6	9	9	11
土 (セラミックベル)	2	7	9	8	9
竹 (スリットドラム)	0	7	7	9	12

部分回答数(8)、無回答数6、数字は人数

1位では回答は鉄に集中しているが、2位、3位になると回答内容は分散している。このことから、生徒たちはどの素材に対してもある程度興味をもつようである。

### 質問2. 「このようなサウンドオブジェを見たことがありますか。」に対する集計結果

ある18 ない27 無回答4

### 質問3. 「ドレミファの音階にとらわれず自由な発想で音楽づくりをすることについて、どう思いますか。」に対する集計結果

興味がある 16 やってみたい 10 関心がない 6  
 わからない 16 無回答 1

#### 質問4.「サウンドオブジェを見て感じたことを自由に述べて下さい。」に対する感想

最初に見たときは何かと思ったが、面白かった。初め見たときは何かと思ったけど、楽器と聞いて驚いた。しかし、意外と面白かった。楽しい感じがした。すごくいい音だった。最初見たときまさか楽器とは思わなかった。鉄琴や楽器のウッドブロックのような音がして面白かった。不思議な音がした。今までに聞いたこともない音ですてきだった。自分もこのようなものを作ってみたいと思った。ああいう物でも音が出るから面白い。とても面白い音や響きのある音を楽しめてよかった。ここちよく、なつかしかった。いろいろな音が材料に（よって）ちがってわかる（聞こえる）ところがおもしろかった。ドレミ・・・にならなくてもきれいだっただ。よくこねーな音が出てくると思った。陶板の形もよくその上あんな音がしたのは不思議だった。いい音色だったと思った。普通の音とはちがった、きれいな音だった。いい音だなあと思った。ちょっと聞いているときれいな音だけど、ずーと聞いているとうるさいような気もした。耳障りな音が出て嫌だった。少ししか聞けなかったけど、とてもきれいな音が出ていたように思う。柔らかい響きが出ていたように思う。意外な物からこんな音が出るのかとびっくりしました。京都辺りにある土管に水があって、その土管の中に水が入ったら鳴るというのをテレビで見ただけでも、誰かが叩いているのを聞いて今思うとその音ににているような気がする。また、そんなのがこの学校にあったら面白いと思う。同じようなのが、叩いたら全部ちがう音がしたのでとても驚いた。ここちよい音・いかりがおさまるような音・ストレス解消になる・しかし、なんかよくわからない。面白かった。鉄は重苦しい音がして少し響いた。木のウッドブロックは普通のウッドブロックよりも少し高い音がした。なかなかおもしろかった。すごい。とてもきれいな音だった。とてもいい音がした。ちょっと面白いと思った。どんな音だったかははっきり覚えていないが、面白い音だと思った。とてもきれいだっただ。全部同じに見えるのにどうしてちがう音が出るのかと思った。とてもきれいな音がして、とてもよかったです。（鉄板のモザイク）の音は不思議な音だった。（原文のまま）

#### IV 子どもの音の受けとめ方

限られた調査対象ではあるが、多くの中学生がプレ楽器について、前述したように「きれいな音」、「すてきな音」、「ここちよい音」というような印象を受けている。また、ドレミの音階にとらわれない自由な音楽づくりについてもかなりの生徒が、「興味がある」、「やってみたい」と答えている。このことは中学生段階においても創造的音楽学習が可能であり、生徒たちもこのような音楽を求めていると言える。

ところで音楽の授業では硬い表情をしていることもある生徒たちが、文化祭でのサウンドコーナーでは歓声をあげて音と戯れていた。「音楽の学習としての音」と「遊びとしての音」とは、音に接するという点では同じであるが、「音」の意味が基本的に違ったものになっているのであろう。

前述のサウンドコーナーでは「学習としての音」から解放されて、音そのものと戯れることの楽しさや面白さを感じ、音に興じることができたのではないだろうか。「なつかしい音」、「面白い音」、「不思議な音」という気持ちの中には「音そのものへの想い」が潜んでいるように思う。

## V まとめと展望

音楽教育に何か新しい刺激はないかという思いが、我々の研究の出発点であった。最初に思い着いたことは「土笛づくり」である。弥生の笛を復元した製作者<sup>7)</sup>を訪ね、手ほどきを受けて学生たちと試作し、これを使っての「音楽表現」も試みた。その後音が出しやすい「オカリナ」の製作にも挑戦し、一応楽器のレベルに達するものを作ることができたと思っている。山口大学で行った音楽教育セミナーにおいても、弥生の笛とオカリナを受講者とともに作ってみた。いわゆる楽器ではないこのような「手作り楽器」の製作を通して、今までの音楽表現とは異なる「音楽表現」について考えてみる機会がもてた。

このような「土笛作り」から始まった一連の取り組みは、その後「素材の音」作りに向かった。身の回りにある物からなんとかして「音」を取り出したいと考え、プレ楽器の製作に取り組んだ。今回のプレ楽器は材料が身近にあるものであり、製作が比較的容易であることから、当初よりめざしてきた「誰にでも製作できる」というプレ楽器の条件をも満たしていると考えている。

次に今後の我々の研究方向について、〈創造的音楽学習〉、〈リラクゼーション〉、〈音への啓発〉の3つの観点から述べてみたい。

〈創造的音楽学習〉を実践するためには、教師が音楽学習における「表現」について明確な考え方をもちることが必要である。教育の場における「表現」は、子どもが技術を高めてモデルに近づくことではなく、素材や媒体を通して「その子らしさ」を具体化することである。そのためには子どもがその多彩な想いや発想を素直に表出できるように、教師が援助することが大切である。この考え方については前稿「あそぶ・さがす・つくる」で一つの提案をした。我々はその中で教師がこれまでの「音楽観・音楽教育観」を脱して、音との関わりを大切にしながら、音楽づくりを実践することを提唱し、プレ楽器とその試作について述べた。今後このプレ楽器の意味づけについては、音楽学習における表現とは何かということを受業実践などで明確にしながらか、確認していきたい。各地で手作り楽器やがらくた楽器が取り上げられ、新しい音楽学習への試みがなされてきた。しかし、それらの活動はいわゆる音楽の基礎段階・初等段階の興味・関心を引き出す手だての一つとして、実践されている状況に留まっているように思う。そこでの楽器はその後の音楽学習において、せいぜいリズム楽器や音響の一つとして利用される程度ではないだろうか。今後、素材のもつ自然な響きそのものが表現の手段になり得るという事実を示すことにより、創造的音楽学習の本質的な一つのあり方を提案したいと思う。創造的音楽学習とは子どもが音や音楽との関わりにおいて「自分らしさ」を表現することである。プレ楽器の製作や活用もその線上でなされなければならない。さらに、創造的音楽学習における音と音楽との関係についても、最近の「サウンドエデュケーション」<sup>8),9)</sup>の研究成果も取り入れながら研究を重ねていきたい。

次にプレ楽器による〈リラクゼーション〉の可能性について述べてみよう。プレ楽器の音を聞いて「澄んだ音」、「なつかしい音」、「こちよいい音」、「やわらかい響き」として感じた生徒や大人も少なくなかった。「癒し」や「和み」から遠ざかりつつある現代、このプレ楽器が聞かれなくなった音への郷愁や見えなくなった音への思い出を誘ったのかもしれない。聴覚以外の視覚的、触覚的要素と相まって素材のもつ自然な響きが人の心に安らぎを与えるとすれば、このプレ楽器は「セラピー」の面でも活用できるかもしれ

ない。ミュージックセラピー（音楽療法）という言葉をよく耳にするようになったが、プレ楽器と「環境音楽」<sup>10)</sup>などを組み合わせれば「サウンドセラピー」、「サウンドメディテーション」などの可能性も考えられるのではないだろうか。

最後に〈音への啓発〉に関して述べてみよう。「素材の音」を基調にしたデモンストレーションを試みたい。最近、見えなくなった音、新しい音、懐かしい音などを求めてサウンドガーデン<sup>11)</sup>が催されたり、音と造形が結びついた「音のある美術展」<sup>12)</sup>が開かれるなど、音と人との関わり方を求めてさまざまな試みがなされつつある。このような新しい動きの背景には、かつて我々の生活の中に溶け込んで、安らぎと憩いを与えてくれていた音への郷愁や自然への回帰とでも言えるようなものがあるのではないだろうか。物が豊かになった今日、人々は物以外の何かを求めている。弥生の土笛などの製作も単なる楽器の復元ではなく、現代における人間と音との関係を考えるきっかけの一つとしたい。プレ楽器によるデモンストレーションが「音」を忘れかけている現代人に「音への覚醒」を促すものであれば、それは今日的意義をもつものと考ええる。

### 注および引用・参考文献

- 1) 野波 健彦, 柳屋 昭(1992); 「あそぶ・さがす・つくる」山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第3号, pp.29-37
- 2) 郡司 すみ(1989); 「世界楽器入門」朝日新聞, pp.43-44
- 3) 金沢 健一; 東京都在住の構成作家, 東京芸術大学構成デザイン科非常勤講師
- 4) ドイツのJ, リンク社製ゾノールのオルフ楽器
- 5) 関根 秀樹(1989); 「民族楽器をつくる」創和出版
- 6) 照喜名仙子; 山口芸術短期大学専攻科学生
- 7) 松岡 敏行; 下関市在住, 先年下関市綾羅木郷遺跡から発掘された「弥生の笛」を復元した。
- 8) R.マリー・シェーファー, 鳥越けい子他訳(1992); 「サウンド・エデュケーション」春秋社
- 9) 鳥越けい子; サウンドスケープ研究機構
- 10) 吉村 弘; 環境音楽作曲家
- 11) 吉村 弘(1991); 「SOUND GARDEN 4」ストライプハウス美術館
- 12) 杉村 浩哉(1989); 「音のある美術」栃木県立美術館